

## 本校の校内研究について

### はじめに

本校の児童生徒は、発達障がい、愛着障がい、不登校、また医療を最優先とする児童生徒等、多岐にわたり在籍している。その中でも、発達障がいと精神科的依存症（不安症、適応障がい、PTSD、統合失調症等）をもち、学力低下、不登校、ひきこもり、自尊心の低下、虐待等の心理社会的な問題を抱える児童生徒も多くいる。

そこで、平成30年度から令和元年度にかけては、発達障がいとそれに伴う様々な問題について理解し、具体的な支援方法について研修、実践を積み重ねることが、児童生徒一人一人の目指す姿の実現につながると考え、全職員が所属学部の枠を外し、それぞれ希望するグループに分かれて、研究実践を行った。

### 研究主題

病弱虚弱支援学校における発達障がいと様々な困難を抱える  
児童生徒への指導・支援の在り方を探る  
～具体的指導・支援方法を通して～

### 目指す姿

病弱支援学校における児童生徒一人一人の自己実現に向けた  
主体的な学習を促し、自立と社会参加を目指す。

発達障がい

精神科的併存症

授業研究

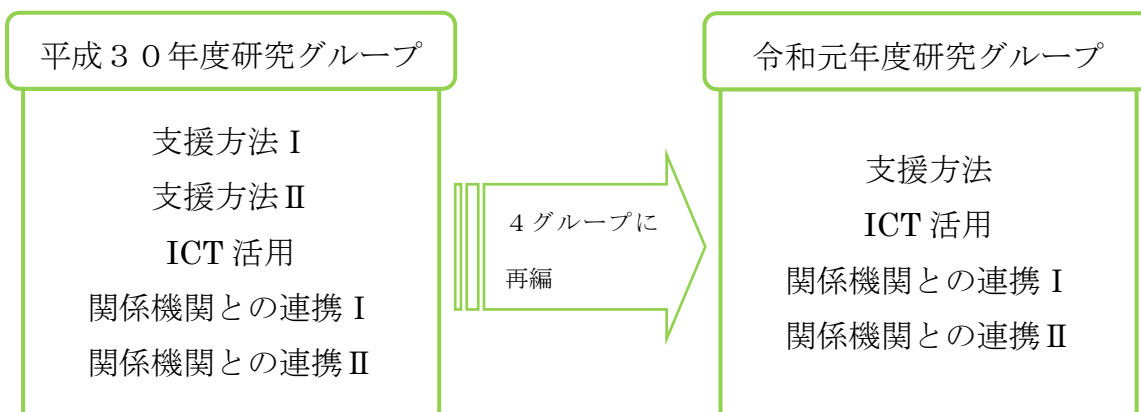
具体的指導・支援方法

事例研究

発達障がいとそれに伴う問題について理解

授業研究会や事例検討、研修会による教職員の意識改革

具体的な支援方法について研修、実践をしていくことで  
児童生徒個々の目指す姿への実現について考える



## グループ毎の研究の成果

### 支援方法グループ

#### 【1年次の成果】

- ・ティーチャーズトレーニングの「行動を3つ(好ましい行動・好ましくない行動・許しがたい行動)に分ける」「肯定的注目を与える」「好ましくない行動を減らす」「効果的な指示の出し方」の4点について事例研究を行うことで、児童生徒の「好ましい行動」を探そうとする視点を持ち行動をみつめるようになった。
- ・提案交渉型アプローチについて文献研究を行ったことで、普段の指導について児童生徒への関わり方も提案交渉型アプローチと重なる部分があるということ、また関わり方の注意点や間違った方法の例を学ぶことができた。また各学部から実践事例を出してもらい検討することで、学部を超えて児童生徒への指導の様子を情報共有することができた。

#### 【2年次の成果】

- ・ティーチャーズトレーニングと提案交渉型アプローチを土台として、支援方法の研修と実践を10人程度の小グループに分けて、実践事例を出し合いグループワークを行った。それぞれの実践事例について、ティーチャーズトレーニングと提案交渉型アプローチの視点があることで、児童生徒との関係性の構築のためには、ティーチャーズトレーニングのような肯定的な注目を与えることも、提案交渉型アプローチのような対話の中で児童生徒の主体的な選択を促していくこともどちらも教師が身につけたい技術であることを再確認できた。

## ICT 活用グループ

### 【1年次の成果】

- ・グループ全職員が ICT を活用した授業実践に取り組んだことで、ICT に関する知識や技術が高まり、実践に伴って作成した報告書(県の自立活動充実事業報告書の様式)は、実践事例集としてデータ保存し、校内で共有できるものになった。

### 【2年次の成果】

- ・グループ研究として、ICT 支援員を招聘し研究授業や各自の実践で活用する ICT 機器等に関する質問に答えていただいたり、助言いただいたりすることで実践を深めることができた。
- ・授業研究会では、総合教育センターの研修指導主事を招聘し指導助言いただいた。具体的に改善点を指摘いただくことで、貴重な研修の機会にできた。

## 関係機関との連携 I グループ

### 【1年次の成果】

- ・関係機関先を見学し、医師から精神科を受診している児童生徒についての治療内容等伺うことで、事例研究において、各学部の児童生徒の事例についてイメージをより膨らませながらグループ内で支援について話し合うことができた。
- ・本校職員へ相談支援、支援会議についてのアンケートを実施することにより、経験値の幅が大きくなった。経験の少ない職員にとっても、経験の多い職員の実践を学べるように、支援会議の記録について回覧等行うことが必要になってくる。
- ・各学部の相談支援、支援会議についてグループ内で事例検討することで、所属以外の学部の児童生徒の支援方法、各機関での支援内容について知ることができた。

### 【2年次の成果】

- ・文献研究だけでなく、2か所の関係機関に目的をもって見学に行き、最新の情報を得たことで、その機関の役割を理解でき、今後児童生徒への支援に役立てていきたい。
- ・これまで行われてきた支援会議について情報交換を行い、よりよい支援会議の在り方についてグループ内で検討することで、自分が支援会議に参加する際に参考になった。
- ・過去の支援会議について、実施目的や開催時期、参加者を整理することで、他の児童生徒の支援会議を開催する際の参考になった。

## 関係機関との連携Ⅱグループ

### 【1年次の成果】

- ・学習室啓発に関わって、学習室啓発ポスターを関係病棟に掲示することにより、学習室の存在を広く知っていただくことができたことと、利用方法(病棟師長への申し入れ)が周知されつつある。
- ・他病院の実践について、小児造血細胞移植セミナーへの参加や北上分教室の見学から、先進例を学ぶことができ、病院との連携や授業対応上の課題や工夫点について、示唆を得ることができた。
- ・脳神経外科病棟師長、精神科医からの講演をいただくことができたことで、連携すべき相手のことを知り、理解する貴重な機会になった。児童生徒に対し、より良いサービスの提供、また支援を行うために、医療と教育の連携をより強固にしていこうとの思いを確認することができた。

### 【2年次の成果】

- ・グループ内で対象者を絞り支援の実際を振り返り、目標設定や手立て、成果、課題について多角的な視点で話し合うことで学びを共有するとともに、各自が受け持つケースの参考にもすることができた。
- ・連携の構図を図式化することにより、支援に際し、どの機関と、何について、どのように協働しているか、またすべきかが明確になり、他のケースにおいても般化できるモデルになった。
- ・小児科医を講師に招いての研修会では、概論ではなく、具体的な事例やエピソードを医師の立場から率直な考えや思いを伺い感銘を受けた。発達障がいをもつ児童生徒への理解を深めることで、児童生徒だけでなく、保護者に対してよりよい支援や気持ちに寄り添う姿勢が大事であることを再認識できた。

## グループ毎に残された課題

### 支援方法グループ

- ・提案交渉していく中で、「やらない」を選択することが常態化してしまった生徒について、背景にどのような不安が潜んでいるのかを探る。
- ・対象となる児童生徒の実態に合わせた適切な支援について、様々な支援方法を理解した上で、適した支援方法をチームで確認する。

### ICT 活用グループ

- ・現在の「発達障がい等に有効な ICT 活用」から一歩進め、教科ごとの指導目標に照らし合わせて有効な ICT 活用の手立てについて探る。

### 関係機関との連携 I グループ

- ・外部の関係機関についての基本的な情報について、全職員が共有できるようにする。
- ・支援会議の記録を個人ファイルに保存したかを点検する体制や、支援会議の開催時期、校内支援会議から外部の機関との支援会議へのつなぐ校内体制作り。

### 関係機関との連携 II グループ

- ・復学について、治療状態や、復学に前向きになれない子への提案する時期や対応の難しさ。他校で行われている退院後のフォローの在り方について知りたい。

各グループで取り組んだ研究実践から得られた成果を日々の指導・支援に生かし、残された課題については、在籍する児童生徒の状況を見ながら、今後の本校における指導実践の中で1つでも課題を解決していく方向を探っていきたい。